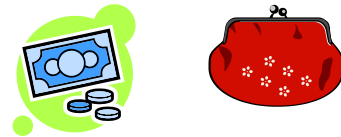


2. 物盗られ妄想

老人福祉施設に入所している人の中には、自分の財産が盗られたと訴える人がいます。盗られたと述べられるものは、お金や財布、洗濯物などの身の回りの物の場合もありますが、中には、かつて住んでいた家や田畑が奪われたと訴える場合もあります。実際には盗られたり、奪われた訳ではないのに、本人が、そう信じきってしまっている症状が物盗られ妄想です。妄想とは、訂正困難な誤った確信のことで、理を尽くして説明しても納得してくれないものを言います。



物盗られ妄想は、老年期に最もよく見られる妄想です。妄想にはいろいろな種類がありますが、老年期ではその約 4 分の 1 を物盗られ妄想が占めます。認知症が原因のものが多く、特にアルツハイマー病に特徴的です。アルツハイマー病ではその経過のどこかで、3 割以上の人に物盗られ妄想が出現する、という報告もあります。認知症以外に、統合失調症やうつ病でも物盗られ妄想が出現することがあります。原因によって、治療法や対応が異なるので、本人の苦痛が強い場合や、訴えが頻繁であれば医師の診断を受ける必要があります。

介護老人福祉施設では、1年間で約 5%の人が物盗られの訴えをすることが判っています。この頻度が意外に低いと感じるくらい物盗られ妄想は、ケアワーカーにとって対応が難しいと感じることの多い症状です。そう感じる理由の一つに、ケアワーカーや他の入所者がしばしば妄想の対象になることがあります。つまり、ケアワーカー等が盗んだ犯人と疑われ、時には、犯人呼ばわりされてしまいます。妄想対象となった人が、その他の入所者から疑いの目で見られることもあります。時には、妄想対象となった人と当事者が喧嘩になることもあります。疑われた人には心の痛みや怒りが生じます。ケアワーカーは、当事者と妄想対象となった人との双方、そして入所者全体のメンタルヘルスや公正の確保に心を砕かなければなりません。物盗られ妄想の対応には多くの時間をかける必要があります。また、盗られたという訴えは時に頻繁で、訴えのたびに、盗られたという物を一緒に捜したり、妄想が周りへ発展しないように工夫したりする必要があります。他の仕事が山積している中で、訴えごとに丁寧に対応することはケアワーカーにとって大きな負担です。

物盗られ妄想は、認知症の初期に出現することの多い症状です。盗られたという訴えが、認知症によるものであることが判りにくい場合もあります。認知症が進めば、やがてなくなっていくことの多い症状ですが、なかには1年以上続く場合もあります。女性に多いことが知られていますが、その理由はわかっていません。



1) 物盗られ妄想の治療

物盗られ妄想の治療は、背景にある病気の種類によって異なります。アルツハイマー病の場合、その治療薬であるアリセプトが妄想を軽減する可能性があります。また、物盗られ妄想にリスパダールなどの非定型向精神薬の効能が最近知られるようになりました。統合失調症が背景にある場合には向精神薬が用いられます。うつ病が原因の場合には、抗うつ薬が有効です。妄想は、説得して改善するものではなく、うつ病の他の症状のようにカウンセリングでは治ることはありません。

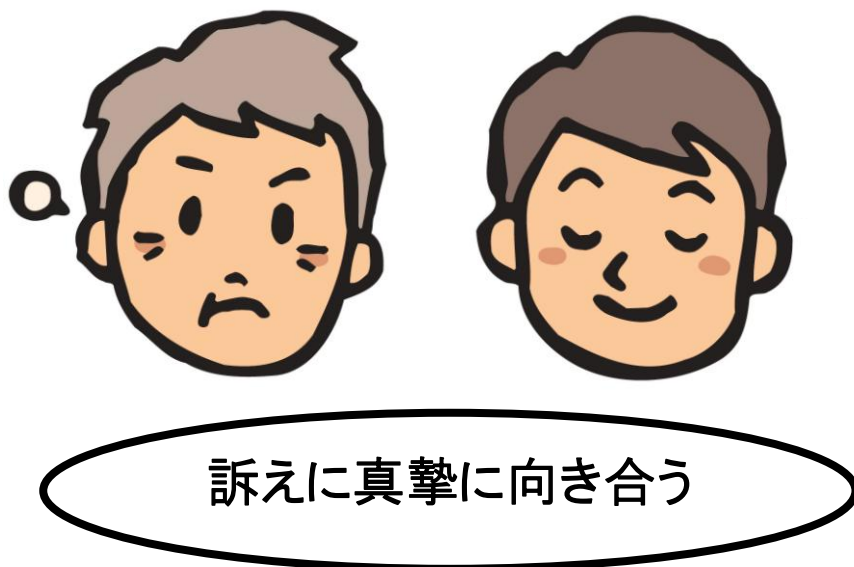


2)物盗られ妄想が起こった時の対応

Step1 高齢者の訴えを妄想と決めつけてはいけません。

他の高齢者が、高齢者の「盗られた」と訴えているものを持っている可能性はあります。盗んだというより、認知症のため自分の物と他人の物の区別がつかなくて、他人の金品を持って行ってしまう人が時々認められます。集団生活の中で、本当に盗んでしまう人がいる可能性も完全には否定できません。また、盗んだのとは異なりますが、ケアワーカーが、洗濯物など預かった物を返し忘れていた場合もあるかもしれません。

高齢者が盗まれたと訴えた時には、まず、その訴えに真摯に向き合う事が大切です。

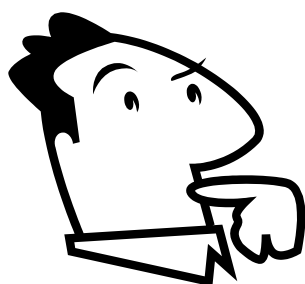


Step2 訴えている高齢者から、盗られた物 (なくなった物)について話を聞きましょう。

盗られたという訴えが発生する時は、たいてい、高齢者は、自分が大切にしている物が身近に見つからず困っています。そして、見つからないのは、誰かが盗ったからだ、と判断してしまっている場合が大半です。

実際に盗られたかどうかの話題には深入りせず、何が身の回りで見つからないのか、という観点から詳しい情報を高齢者から聞き取りましょう。見つからない物の、形や大きさ、個数、最後にそれを見たのがいつだったのかなど、出来るだけ具体的に聞きましょう。具体的に聞く事が相手への共感を示す事になります。

しかし、盗られたということを肯定する必要はありません。むしろ、「そうかなー」と柔らかく疑念を伝えたり否定したりするようにします。



そうかなー？

具体的な名前を挙げて他の入所者が盗ったという場合にも肯定してはいけません。その入所者が、そこにいあわせた場合には、そんなことはないと思いますよ、とむしろ否定すべきです。そして続けて「どこかにしまい忘れているかもしれないので、一緒に捜してみましよう」と続けましょう。泥棒扱いされた人には、後から、「あなたが盗んだのではないことは解っていますよ」と伝えましょう。

あなたや他のスタッフが盗ったと疑われた時には、はっきり否定して下さい。そして次のステップに進みます。物盗られ妄想は、身近な人、普段世話をしてくれている人を妄想対象にする傾向があります。妄想があなたに向かうのは、あなたのケアに問題があるからではないので、気に病む必要はありません。

Step3 盗られた物(なくなった物)と一緒に捜しましょう。

なくなった物が、現実には存在しているかどうかに関わらず、高齢者の訴えに添って、まずは、高齢者の身辺と一緒に捜してみましょう。

一緒に捜しましょう



高齢者自身が捜すのを手助けする態度が大切です。また、高齢者から、あなたの捜しているところを見えやすくして作業しましょう。高齢者の”盗られる”という不安感を減します。盗られた物がお金の場合には、2人で対応するとよいでしょう。

しかし、盗られたと訴えられた時、他の仕事で忙しく一緒に探せないことがあるかもしれません。その時は、今は他の業務が入っていて時間が取れないので、何時に来て相談します、と伝え、後から一緒に捜すようにします。

盗られた物と言っていた物が見つかったら、見つかったことの喜びを伝えましょう。

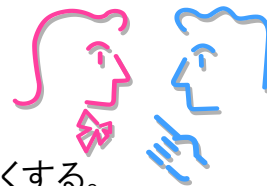
例えば「ここにありましたね。よかったですね」と伝えると良いかもしれません。

盗られた物がみつからない場合はやっかいです。この時は「捜してみたけれど、今は見つからないですね。後からもう一度捜しますね」と伝えて作業をいったん終了します。

盗られたという物は、実際にはもともと持っていない物の場合や、食物やお金など、既に消費されて手元にはないものである場合もあります。また、ご本人が誤って捨ててしまっている場合もあります。

Step4 物盗られの訴えのあったことを他のスタッフに伝えましょう。

物盗られの訴えがあったら、盗られた物が見つかってみつからなくても、フロアの上司に伝え、同僚と体験と情報を共有しましょう。これまで老人福祉施設では、物盗られ妄想へのケアを模索し、いくつかの方法を蓄積しています。ケースバイケースで有効な方法があります。今回のケースでも、うまく適用出来る方法があるかもしれません。



- 貴重品を入れる場所を一つにする。財布を一つにする。
- 床頭台の周りの不要品を整理し、必要なものを捜しやすくする。
- 収納棚や床頭台の引き出しに鍵をつける。
- 出納簿を一緒につける。
- 財布や貴重品を預かる。
- あなた以外のキーパーソンとなっている職員に対応してもらう。
- 家族にも一緒に捜してもらう。

当人の能力を引き出しながら対応することが原則です。

時には、説得することが有効である場合もあります。当人とケアワーカーの間に、それまでに築かれた信頼関係がある場合に説得は有効です。

他の入所者が妄想対象になっている場合には、部屋替えやフロア替えを行うことも考えるべき選択肢です。これにより、他の入所者への被害を防ぐことが出来るからです。妄想自体は、部屋替えなどでいったん改善しても、時間がたつとまた形を変えて現れてくることが多いようです。

ケアワーカーが妄想対象となっている場合には、その高齢者へのケアを他のスタッフに交代してもらう方法があります。ケアをスムーズに進める上で、とても有効な方法です。

物忘れが進んでいる高齢者の場合には、捜しているうちに、物を盗られたと訴えていたことを忘れる場合もあります。

中には、訴えが続く人もいます。一つの問題が解決すると、何か別の物が盗られたと訴えたり、しばらく時間をおいて同じ物が盗られたとまた訴えたり、妄想内容が変化したり繰り返したりしながら続く場合もあります。あなたは、Step3とStep4を繰り返し行わなければならないかもしれません。

Step5 対応に困るケースは、医師に相談しましょう。

物盗られ妄想は、認知症の進行にともなって収まっていくものです。しかし、訴えの続く期間は様々で見通しがつきません。盗られたと繰り返し訴える人、訴えの増悪する人、他の入所者を巻き込む人については、医師に相談しましょう。医師の診断と治療を受ける事で、高齢者本人だけでなく、周りの人も楽になり、ケアワーカーの負担感も軽減する可能性があります。

